

『中庸姿』の成立

— その俳壇史的意義 —

米 谷 巖

いわゆる談林俳諧史上、最も大きな話題と反響を俳壇に投じたものといえば、西鶴の幾度かの大がかりな矢数俳諧の興行を別にすれば、管野谷高政編の『惣本寺俳諧中庸姿』（延宝七年九月刊）を先ず挙げるべきであろう。

ところで本書、なかならず巻頭の高政独吟百韻の特色や、本書を導火線として延宝七・八年の上方俳壇を湧かせた論戦の経緯や俳壇事情、さらにはその意義などについては、すでに語家の御説に詳しい。

小稿では、主として『中庸姿』を生むに至るまでの高政、およびその周囲の俳壇状況を、先学の所説に導びかれながらなるべくいねいにたどってみることによって、本書の俳壇史的意義といったことに触れてみたい。

一

延宝三年ころ江戸から京へ移住したとみられる（註一）高政は、かねて共感と敬意を寄せていた宗因（延宝三年七月刊『絵合』参

照）に、遅くも延宝五年の夏には、親しく指導を受ける機会を得た（五年七月刊『後集絵合千百韻』）。

そして翌六年の歳旦帳には「俳諧惣本寺」なる問題の寺号が初めて見え、しかも井筒屋板『俳諧三ツ物揃』によれば、京俳壇における貞門の元老たる西武（この年、推定69歳）・梅盛（60歳）・季吟（55歳）らをはじめ、ほとんどの引付が半丁ないし一丁、多くも二丁にすぎないのに、高政と似船（安静門）の二人のみが四丁という格外の大冊となっている。

このことについて、貞門側の匿名氏は「此寺号を三ツ物にも書して国々へひろめ、りちぎなる田舎人にいかさま上手ならんとおもはせ、初心のころをくらまして点料をまねかんとこの計略」（八年四月上旬刊『綾巻』）だと痛罵している。また似船についても「年々歳旦の発句共あまた引付に入る。皆門弟の句かと思へば、さもなきものゝ句をも是非〜と乞語てかき入る事、板行料を取らんため、初心の句をもほめそやして取集る也。」（同書）と、その内情を暴露して、「売僧のわざ」だと激しく罵っている。

宗因流の人氣にいち早く便乗して、あくどく稼ぐ高政、似船らの自家宣伝ふりと俳壇進出への野心が、はっきりと読みとれる事実である。

なお高政が惣本寺を自称するようになった時期についてであるが、五年七月刊の『後集総合千百韻』には「洛下住 菅野谷高政集之」と奥書して、惣本寺を名乗っていないことよりみて、本書の成つて以後、六年の歳旦帳を出すまでの間、すなわち延宝五年の後半の半歳たらずの間のことと推測される(註2)。

その動機について、許六は「江戸談林に対して、洛の惣本寺の名あり」(歴代滑稽伝)と述べているが、ともあれ談林より格の高い惣本寺を名乗るほどにかれの野心がふくらむに至つた延宝五年は、保守派の牙城たるこの俳壇にも漸く新風の波が浸透し、宗因流転向派の撰集活動が急に顯著になつた年であつた。高政の『後集総合千百韻』のほか、自悦(季吟門)が『釈教俳諧』を、常短(季吟門)が『散帚』および同書に付録して当時人氣を呼んだ『蛇之助五百韻』を、また似船が『隱箕・隱笠』をあいついで世に問うた。

この年、旧派からは梅盛が付合用語辞典たる『類船集』(寛文九年刊『便船集』の増補版)を出したのと、延宝三年興行の季吟父子の三吟『花千句』をめぐる批言応酬の書『肩入奉公』(三楽)と『大長刀』(水雲子)が上梓されただけで、貞門派の作風を具体化した新たな作品集のたぐいは皆無であつた。

以後、延宝末年に至る六・七・八年についても、論戦書以外ではわずかに維舟(八年六月、79歳没)が『溜池十歌仙』『江戸水道』(六年)、『名取川』(八年)を出版して独り氣力を示し、他に梅盛

が『道連草』(六年)を出しているのを見るにすぎない。貞門の論客随流(西武門)が、延宝七年の十二月に成つた『俳諧破邪顯正』の中で「宗因くゝとて京・大坂・江戸に渡り、今既に日本国に流布し、大形此風にかたぶきぬ。それ故古風をあふぐ俳諧士、当風に吹せめられて、片角に目ばかりうごくやうに見え侍る。」と認めざるをえず、「さればこの比、何者か仕たりけん、当風のすたり物、隠元の墨蹟・貞徳流の俳諧・鎌倉团右衛門」とかけり。」と述べて歎いているごとき状況は、京俳壇では延宝五年から顯著となり、全国的に六・七年の間に頂点に達したとみられる。

二

こうした宗因流風靡の趨勢と歩調をあわせて、高政の活動もこの数年間にきわだつて活潑さをみせる。すなわち六年の三月一日には、わざわざ大阪から新風の総帥たる宗因を自邸に招いて「賦何種俳諧」百韻一卷を興行している(註3)。これには、『後集総合千百韻』(五年七月刊)の前後から高政に親近している季吟門系の友静・如風・江雲(律宿)らの地元の連衆のほか、大阪から惟中が宗因に伴なわれて参加していることは興味をひく。惟中が『破邪顯正返答』(延宝八年二月刊)で「去年のいつにか有けん、かの高政が宅へ、梅翁老師に、京那波江雲、予相隨ひて一日参會し、百韻の席を終り、高政が文才のほど、俳諧の位もよく知たる也。」といっているのは、おそらくこの三月一日の百韻をさすものと思う。惟中は三月のこの上阪・上京の直後、初夏のころに(註4)、周知のごとく「梅翁師の事大老になられしにより、此道の事は跡目にたのまれて」と偽り触れて備前岡山をひき払い(八年四月刊『備前海

月)、大阪に居を移している。宗因の「跡目」たらんとする野心を抱いて、宗因の膝下大阪に転居することを惟中がいつ決意したかは明らかでないが、実力に比して過分な高政の人氣のほどや、その野心的活動ぶりを直接に見聞する機会をもったことは、惟中の野心と決意を促がす一つの刺戟剤となったことは否めないであろう。

高政は同じく三月に、奈良の月松軒紀子に乞われて『大矢数千八百韻』(六年五月刊)に加点、さらに序文を贈っている。前年の九月に奈良の極楽院で催したという紀子の大矢数が、同じ年の五月に西鶴が大坂本覚寺で興行した一日一夜千六百句独吟(『西鶴俳諧大句数』)に挑戦して挙行されたものであることが高政の序に述べられている。高政は表面的には紀子の大矢数興行の動機を、紀子に代って紹介しているにすぎぬのであるが、その言いまわし方にもうかがえるように、高政自身の西鶴に対する對抗意識の反映していることは確かであろう。

西鶴は「惣て此道さかんになり、東西南北に弘る事、自由にもとづく俳諧の姿を我仕はじめし己来也。」(九年四月刊『大矢数』自跋)と、われこそ今日のごとき盛況をもたらした新風運動の点火役を勤めた者であることを誇示強調している。事実『生玉万句』(寛文十三年興行)以来、宗因流推進の牽引車の役割りをはたしてきたのが西鶴であった。その西鶴にしてみれば、高政の侮蔑的言辭はいかにも憎惡無礼で、憤りを禁じえなかつたのは当然であろう。七年三月二十二日付の尾張の知足宛て書簡で、紀子の千六百韻興行が実は「矢数俳諧」ではなく「作り物」であることを暴露し、「内証存ながら高政が点、おかしく候。」と非難し、また同じ七年三月三千風興行の三千句独吟『仙台大矢数』(七年八月刊)の跋文で、「誠

に不都合の遠者だて、誰か其巻に点をつけたりし、京都惣本寺高政こそ同じ心入おろかなる作者也。中々高政などの口拍子にては、大俳諧は及ぶ事にあらず。」と痛罵している。

ともあれ新風運動の第一人者阿闍陀西鶴に對抗意識を抱くほどに、このころ高政の俳壇の野心と自負は一段と膨張してきたことを示すものと思う。またいかなるつてによるものか具体的事情は不明であるが、奈良の紀子から、しかも西鶴に挑戦して成った千八百韻もの大作に加点の依頼を受けたということは、当時の高政の俳壇的人氣と地位のほどを窺わせるものであろう。

同じ六年の夏には、宗因に所望して、例の

すゑしげれもりたけ流の惣本寺

なる発句を贈られて、得意絶頂に達したのであった。この発句は随流のいうように「大坂宗因を高政宅へ謂じ、一会有り」(破邪顯正)さいのものか、それとも大阪から発句だけを求めに応じて托送したものか(惟中「破邪顯正返答」)疑問であるが、いずれにせよ彼のばあいは、宗因を思慕する純粹な熱意のあらわれというだけではすまされない。つまり、野間光辰氏もすでに説いておられるごとく、「一派の勢力の拡張と宣伝のため」(註5)という意図があったにちがいない。

じつ随流によれば、宗因が右の発句を「挨拶仕たりとて、其よりいよく同類雲霞のごとくあつま」(破邪顯正)るようになったという。例えば同じく六年の秋には、筑前志賀島の西海(宗因門)が上阪してきて、大阪を中心に京・阪・堺の宗因流の俳士達(十名)を訪ねて歌仙の両吟興行を乞い歩いた(西鶴序『大観』)が、京ではただ一人高政の門を叩いている(大阪・堺のほかでは伏見の

任口、淀の三ヶとの両吟がある。

また尾張鳴海の知足は、既述のごとく『紀子大矢数』に関して西鶴から高政の陰口を聞かされ（七年三月二十二日付、西鶴書簡）ていながら、その数か月後に有馬入湯の帰途、大阪に西鶴を訪ねて（七月十日）俳諧を興行した直後、高政亭をも訪問して（同月十三日）会吟している（知足齋日記）（註6）。

知足はまたこの旅から帰国（七月十九日）して間もなく編んだ『尾張鳴喚統集』（八月自序）で「去年新しく仕立し三ツ物も、こ」としはあかつき古めかしく、きのふはけふに替る時の花を窺見んと」して、西鶴・保友・幽山・松意・常短らと共に高政にも合点を乞うている。

なお『中庸姿』（七年九月刊）には、出羽尾花沢の清風が独吟歌仙一卷（発句の季は、冬。六年冬の作か。）を寄せている。その他、駿前丸岡の鶴一と高政との両吟一卷も入集する。など、延宝六・七年のころには、地方の好き者たちの間にも、京における新風の代表的点者として名を売っていたことがわかる。

まして地元の京都では、褒貶はともかく、高政は今や新風の第一人者と目されるに至っていたことは確かである。随流が『破邪顯正』（七月十二月刊）に伝える次の話は、どこまで正確で、またどの部分が高政の捏造なのか明らかでないが、そこに權威をぬけめなく利用する高政の死名癖を見ると同時に、俳壇の外で話題にのぼるまでに名声を得ていたことが推察できる。すなわち、延宝六年（冬）のこと、

さる院參の御方より、高政は俳諧の名人ときこしめし及れたり。「百韵つかふまつりて御目にかけよ。」と院宣をかうぶり、

『恋の百韵』を奉りければ、観感以甚しく、御次もあらば法眼になし下されんとの宣旨也とて、旧冬弟子共にふれながし、早くも翌七年の歳旦三つ物に、いかにもすでに法眼を許されたかのごとく「冥加にかなふ事ありて」と詞書きして、

鷺に五位惡意もうぐひす四方にけさ
惣本寺
弟子高政
目なれぬ燕尾あら玉の年
正長

なる歳旦吟を掲げて板行した、という。

したがって俳壇の内部では、なおさらのこと新風に共鳴する者たちが高政の門前に蟬集したのであることは、想像にかたくない。維舟が『俳諧顯返』（七年冬刊）で「此總本寺はいまだ初学の者にて候が、御覽候ごとく此あたりはたるい大馬鹿・赤ばかりとて、末寺々々のおほければ、間々の道すがら三足飛する小僧めら、高政師としたひ通ひぬ。下女やはだしの者迄も、うちはき掃除になりさけぶ。」と罵り、随流が「信徳・友静・如泉など云者は、随分貞徳流の正道を好みて、一方の俳諧大将とも成べき器量なりしが、かれらも皆惣本寺の末寺となりて、高政和尚に相したがふ」（七年十二月刊『破邪顯正』）と歎いているのもわかる。さらに春澄は、このような貞門側の批難を点者同志の顧客争いと見なして、「むかしより此所に点者ども余たありしが、今流に打まけ、点料の巻どもを高政にまくりとられ、あまつさえ友静・如風などは季吟・湖春が旦那殿ともあふぎぬる門弟成しが、今当俳にかたぶく事云々」とか、「痛はしや。いづれも昔は齒がねをならし、人なれども、今は門口草村となつて、点料点とり足ぶみもせず。あら痛はしや候。」（八年二月上旬與『俳諧積政』）と、旧派の宗匠たちを露骨に擲擲している。

その春澄（もと維舟門）自身、むろん新風に心酔していて、『中庸姿』には、おそろくは延宝六年の冬興行のものと思われる春澄（この年26歳）主催の高政との両吟百韻が見える。もしこの両吟百韻が六年冬の興行にまちがいないとすれば、彼はこの年の秋江戸に下向して、風虎・露沾父子のサロンにつながって江戸俳壇の新風派の中心勢力となっていた幽山・言水（29歳）・似春・桃青（35歳）らと『江戸十歌仙』（六年十一月中旬刊）の交歓をおえて帰京したばかりであった。

六年の惣本寺歳旦引付にはまだ出句していなかった春澄が、八年の高政歳旦帳（井筒屋板『元旦発句』）（註7）に参加していること、また同年二月上旬には前記のごとく『誹諧賴政』を著して、旧師維舟の『熊坂』（七月冬刊）を駁撃、「古流のつぶして我也」と名乗って、高政を擁護する挙に出ているなど、少くも六年の後半から七・八年にかけては、惣本寺に帰依していたことは明らかである。

また随流が、かつては「随分貞徳流の正道を好みて、一方の誹諧大将とも成べき器量」の信徳・友静・如泉らが「皆惣本寺の末寺となりて、高政和尚に相したがふ」（破邪顕正）と言っていることは、延宝七年の春興行かと推測される信徳（竹犬とも。もと梅盛門。この年47歳）主催の五吟歌仙が、『中庸姿』の巻軸に収められていることでも証せられる。

周知のように信徳は、先に延宝五年の冬から翌年春にかけて江戸に滞在、桃青・信章（素堂）と『江戸三吟』（『桃青三百韻』）を興行板行したが、さらに同じ年の冬から翌七年春にかけて千春（維舟門）と再び江戸に下り、六年秋東下の春澄（江戸十歌仙）同様

露沾、泰徳・如流、および幽山、桃青・言水ら内藤文学園の諸家と風交を深めている（千春編『仮舞台』）。

その帰京直後の興行かと思われる『中庸姿』巻末所収の五吟歌仙は、高政を宗匠に仰ぎ、『拾穂軒都懐番』（延宝七年冬、および八年春興行）『七百五十韻』（天和元年一月刊）『一橋』（清風編。貞享三年九月序）『三月物』（貞享四年九月刊）等でも同席していて、少くも延宝末から天和・貞享にかけて信徳と親交あり、かつ、もと同門でもある如泉（梅盛門。この年36歳）。および『京三吟』（延宝六年七月下旬刊）のほか、延宝八・天和三年の信徳歳旦帳に政定らと出句。その他七百五十韻・一橋・三月物などに同座していて、あるいは信徳の門人かといわれる（註8）仙庵。さらに『絵合』（延宝三）に発句入集、六年の高政歳旦三つ物に出句、八年の『是天道』の追加に両吟百韻の相手をつとめ、さらに九年三月序の『ほのゝ立』で高政・秋風との三吟連句入巻に加わるなど、このころ事実上高政に随従していたと見られる定之（29歳。『誹諧大系図』には西武門とする。晩年は前句付の点業を専らとした（註9）。元禄十三年歿）が参加している。

三

いわゆるク天和調々といわれる次期流行の俳風のリーダーとなる信徳や春澄らが、同じく次代の覇者となる江戸俳壇の似春・桃青・言水らと積極的な交流をはかる一方で、同時に、一般に異体・放埒をもって知られるク半天連社々高政の門に出入している事実は、一見奇異な印象を受ける。

しかし、これは実は何ら不審とすべきことではない。少くも延宝

七年（前半）までの時点では、いわゆる談林派の間には、師系や派閥あるいは地域を越えて、宗因流に参する同志という、あえていえば逆帯感といったものが、なお保持されていたと推測される。例えば江戸談林派のリーダーとして名を馳せた田代松意が、延宝六年の秋「俳諧執行的のためとて、はる／＼のほりて、京都の作者に残らず、参加し」（西鶴名残の友）たが、その一日を江雲亭で西鶴と三吟三百韻（虎溪の橋）を催している。また同じ秋、西鶴は維中と両吟秋千句の興行を企てている（太郎五百韻）（註10）。しかして翌七年三月には、西鶴は知足宛て書簡で「今こそ江戸も京も、私のぞみの俳諧に仕申候。是神力とよるこび申候。」と述べている。「日本に梅翁其枝の梅」（七年四月、西国撰「見花教寄」）と宗因の嫡流を以て任ずる西鶴の目に、当時点の全国の俳壇状況はきわめて満足すべきものと映っていたことでも、うなずけよう。

また同じく七年の秋には、江戸の四友が似春・芭蕉の見送りを受けて（『芝翁集』——『一葉集』他所収三吟二百韻）上落、つづいて冬には似春も上落、翌春にかけて京阪の師友と交歓をとげている。その似春は、かつて住んでいた大阪では、十一月七日、旨恕亭で梅翁・保友・西鶴・惟中、益翁ら大阪俳壇新風派の一流どころ総出の歓迎を受けている（七年十二月自序「わたし船」）。

一方、翌月の十二月十三日には京にあって、旧師季吟・湖春・正立父子を迎え、友静・順也・如風・春澄・信徳らの参加も得て百韻を興行。また同月廿三日には如風主催のもとに、湖春および如泉・信徳・春澄・友静のほか高政をも加えての世吉興行に参加。さらに翌春には、春澄主催、常短・高政をも加えた湖春・如風・如泉・信徳らとの百韻興行に招かれているのである（拾穂軒都懐情）。また

同じころの二月に、折から上落中の宗因を某亭に四友とともに訪ね、三吟「山の端千句」（八年六月刊）の大作の指導も老師（75歳）から得ている（西岸寺任口に序を乞うている。）

すなわち概括的にいえば、なおこの時点では西鶴・惟中・高政・松意ら宗因流の野心的旗手たち相互の間の対立・反目も表面化していないし、次期俳風の主流派となる信徳・春澄や似春・言水らの季吟・湖春系グループと高政、また宗因膝下の大坂俳壇の諸家などの間にも、隔意は生じていなかったものと思われる。

「これより先、三たび句帖を願わし、三度風駄をかへて、三たび古し」と新しみを求めてやまぬ気概に談林超克の意志を認めて、史的意義を高く評価されている『東日記』（九年六月中旬成）に、言水が友静に乞うて巻いた両吟歌仙一巻が収められている。興行の年は明らかでないが、いずれ延宝七年ないしおそくとも八年（夏）の作であろう。その友静の発句に「宗祇の蚊帳」ならぬ

夫はそれ宗因の紙帳難波風

とあるのは興味をひく。友静は次期の新風流行期にも、信徳らに伍して『みなし栗』（天和三）・『蝨集』（貞享元）・『一棹賦』・『稲延』（貞享二）などに入集、『一橋』（貞享三）に序を贈るなど貞享のころまでは、天和調の主流派の一方の雄としてよく活躍している。その友静が言水との両吟歌仙興行（東日記）の時点で、なお宗因（流）への思慕を高唱しているのである。

その「今世上に其名高ふして、おそらく肩をならぶる人もなき宗因」（八年三月奥『綾巻』）にいち早く近づき、京俳壇の宗因流の中では常短よりも似船よりも自悦よりも、宗因と直接に繋がること、宗因の人氣にそのまま便乗できたのが高政であった。一部の職

業佛士のあいだではともかく、一般の宗因流愛好者にとっては、従前どのグループに属していようと、当時人気第一の高政に接近をはかりこそすれ、特に背を向ける理由はこの時点では、なかったはずである。

四

「友静・如風などは、季吟・湖春が旦那殿ともあふぎぬる門弟成しが、今当讎にかたぶく」（八年二月上旬奥『頼政』）とあるとおり友静は殊に寛文中には似春らと共に季吟・湖春父子に親炙していた（延宝四年刊『季吟廿会集』他）。しかし延宝に入ってから、早く高政の『絵合』（三年刊）に巻句入集を初めとして、『後集絵合千百韻』（五年刊）には、大阪の古老保友を初め地元からは高政・如風を迎えて催した七吟百韻一卷が入集。翌六年の惣本寺歳旦帳には、やはり如風らと出句。また同年三月一日の宗因を迎えての高政主催の百韻に如風らと出席。また七年暮れに江戸の似春を迎えて如風が催した四十四にも高政らとともに一座している（拾穂軒都懐帯）。さらに翌八年の高政の歳旦帳にも、如風と一緒に出句している。

なお、このように友静と親しい如風は、『誹家大系図』には、如雲（天和四年刊『五百韻三哥仙ならび』を編む）とともに如泉の門人としているが、高政に乞うて巻いた両吟歌仙一卷が『中庸姿』に採られている。なお信徳・春澄らの『七百五十韻』（九年一月刊）のメンバーでもある。

随流に「古風をいまだすす、齒を喰しはりて構忍すれども、門弟より云くさす故、こらへかねて邪道へ片あしきし入る宗匠もあ

り。」（破邪顕正）と評されているのが、実は季吟であり、さらに湖春・正立の「子共二人は、先立て引おとされ、かの太鼓誹諧に成たり。」と『綾巻』（八年三月十日奥）に指摘されていることは周知のことである。そして、延宝七年十二月から翌春にかけて、当時惣本寺に与している春澄・如風・信徳・如泉・友静らの新風派の俊英たちが、似春を迎えて設けた吟席に、湖春（34歳）が毎度出席していること、さらに季吟までが似春主催の会には顔を見せて、似春の成長ぶりを祝している（註11）（ただし、それにはさすがに高政は同席していない）。ことが、破邪顕正・綾巻のことを表書きするものとして、すでに指摘されている（註12）。

似春といい、また季吟・湖春が「旦那殿」とも仰いだという（頼政）友静・如風といい、またリーダー格の信徳といい、いずれもかつては季吟・湖春の門に参入していた者ばかりであった。この『拾穂軒都懐帯』集録の連句の中に一度だけ顔を見せる（しかも高政とも同席している）常短にしても同様である（季吟廿会集）。皮肉な巡り会いと評せようか。

このほかにも著名な作家ではないが、高政が宗因流への旗色を初めて鮮明に打ち出した『後集絵合千百韻』（延宝五年刊）に独吟百韻を寄せている、只計、および高政との両吟百韻一卷を採られている正継（八年の高政歳旦帳にも出句。）も、かつて寛文の末頃には季吟・湖春に指導をうけた一人であった（季吟廿会集）。

宗因流流行の風潮に抗して、地盤の確保をはかるべく季吟が、「かつはその風跡を見ならはしめ、かつはかの正道をすゝめて、思ひ邪なからしめんため」に湖春・正立と巻いた三吟『花千句』（延宝三年成）が、五年になって、熊本の三楽と称する者（京住の某の偽

名であろう。)によって批判を受ける(眉入奉公)しまつてあつたことも思いあわされる。なお湖春が、特にこの延宝七年以後、新風派に接近を見せるようになった事情については、榎坂浩尚氏が明らかにされた。氏によれば、季吟は俳壇への失地回復の意欲をもちや失い、俳諧面での主導権を息湖春にすべて委ねて、自身はこの年月以後ふたたび古典の註釈生活に帰り、特に『八代集抄』の註釈に専念するようになったという(註13)。

貞徳直門の長老の中では、最も年若くて気力も活動力もあり、勢力もあつたはずの季吟にして、もはや「都にいらぬふる坊主」(八年二月上旬與『頼政』)と罵られるありさまであつた。ちなみにこの時期の他の貞門の宿老を一瞥してみても、たとえは立圃(75歳)・安靜(50余歳)はともに寛文九年にすでに亡く、貞室(64歳)も延宝元年には歿している。延宝時代に生き残っていた京俳壇の最長老としては令徳(良徳)があげられるが、高齢に加えて才氣に乏しく、寛文末年のころからすでに俳壇から半ば忘れられた存在であつた(註14)。そして宗因流が極盛期に達したちょうど延宝七年(91歳)に他界している。その令徳とともに貞徳の愛弟子であつて西武(天和二年、78歳歿)は、やはり温厚でひかえめな人柄もあつて、延宝三年に『沙金袋後集』を上梓して以後は、編著もなくおわつている。(ただその門から論客随流を出していることは注目される)。また梅盛は当時なお50代で、元禄の半ば過ぎまで生きたが、人となり朴实で覇氣に乏しく、時流にかまわずあくまで古風を墨守していたが、ことに延宝七・八年のころには「結局しつまりて、大方は会を止め、句を問へども語らず」(八年三月十日與『綾巻』)という落魄ぶりであつた。

五

かく見てくると、延宝七年九月に新風改宗者の中でも俊秀を結集して出版された『中庸姿』は、まさに京俳壇を宗因流が制圧したことを誇示する記念すべき撰集であつた。そして同時に高政が京都俳壇における新風派の主導権を獲得したことをも示している。この同じ九月に、期せずして常短が『塵取』(横本二冊)を、似船が『火吹竹』(一冊。未見)を出している。しかし『塵取』(下巻のみ伝存。付句集。)を見ても、知名の作家はほとんど見当らず、入集者の顔ぶれにおいて『中庸姿』の威容には遠く及ばない。当時点における高政の位置は、随流が「大坂にて阿闍陀西鶴、京にては惣本寺半伝連社高政、兩大将として、似船、常短など、其外一騎当風の手だり共」(破邪顕正)と評していることばによつてもうなずけよう。

なお『中庸姿』には、これまでに触れた信徳・仙庵・春澄・如泉・如風・定之・清風などのほかに、政定・正長・春恵・一方らの独吟歌仙が入集している。そのうち政定は延宝六年の惣本寺歳旦帳に出句しているが、同時に信徳とその弟子格の仙庵と『京三吟』(延宝六年八月下旬刊)を巻いており、また延宝八年および天和三年の信徳の歳旦帳に仙庵とともに出句、貞享五年にも信徳・重徳との三つ物に出句するなど、仙庵と同じく信徳の門弟であろう。そしてやはり『七百五十韻』にも参加している。

つぎに正長の名は『季吟廿会集』所収の寛文四年三月廿五日興行の九吟百韻の末席に見えるほか数書に散見するが、『中庸姿』入集の正長とはたして同一人かどうか、今たしかめえない。ただし『破邪

頭正』に紹介する延宝七年の高政の歳旦三つ物に、高政の笈句に対して胸をつけている「弟子」と肩書した正長であることは確實である。なお八年の高政歳旦帳にも、高政・春恵との三つ物を載せている。しかも、高政の「弟子」とわざわざ肩書して得意然たる正長が、やはり『七百五十韻』に加わっているのは注目される。

春恵については、八年の高政の歳旦三つ物に出句していることを知るだけであるが、おそらく正長らと共に、高政の人気にひかれて門人格におさまっていた連衆の一人であろう。

一方については、調査が及ばず不明であるが、弱小作家であろうことは確かである。

六

しかしながら『中庸姿』は、高政によってリードされ、統括された京都宗因流の達成を示したと同時に、以後急速に宗因の風体を無視し、宗因その人を置き去りにして、思い思いにひたすら新奇を競い、反目し、分派活動に狂奔するという無政府的渾沌状態に俳壇を誘いこむ導火線となった、いわば罪深い作品でもあった。殊に新旧両派から非難攻撃の的になった巻頭の「皮肉の百韻」、『破邪頭正返答』(付載)に比べてみても、いわゆる一句の埒あかず——付句の独立性の喪失傾向が強いことなど、そういう意味で、より末期的または前衛的作品だといえる(註15)。しかしこれは「信徳は高政よりある、事彰し」と『破邪頭正』に言うごとく、高政一人の傾向ではなかった。

しかしして延宝七年に京都俳壇から世に問われた作品集は、千春の

江戸土産たる『仮舞台』(三月刊)を除けば、前記の中庸姿・取腹・火吹竹の三書だけであるが、宗因が年礼に来訪した西吟に對して「世上の俳風異躰なる事を噫」したうえ、『そうよそよ昨日の風躰一夜の春』と吟じ与えたのが延宝八年正月であった(宇津不之曾女)。また「当世の風躰年々日々ところどころにうつりかはる。新しく珍らしく、かなはぬ老の耳にだに面白くうらやましながら、初学の人いづれをよしと思ひ定むる方なくやと覚えて」(梅翁宗因笈句集)あるいは「此ころの世上の句躰を梅翁もなげき給ひて」(続無名抄)、『今筑波や鎌倉宗鑑が犬桜』と詠じたのは、貞・談入り乱れて白熱的論戦が京・大阪俳壇を湧かせていた最中のことであつた。またつづいて、大阪俳壇の事実上のリーダーであり、かつ宗因の後継者をもって自任する西鶴(『西鶴大矢数』自跋)や惟中(『続無名抄』近來俳諧風躰抄)も、いまや守勢に回つて、世上の俳風の乱脈を難じ、宗因流の正統派意識に立つて教戒的言辞を吐くようになる。

そうした激しい変風と分裂状況の中から、談林調を超克すべく、天和の新風への氣運を作り出した先駆的作品として、史的意義を高く評価されている『七百五十韻』(九年正月刊)が生まれた(おそらく八年の興行であろう)。しかもその八人の顔ぶれは『中庸姿』に参集した有力メンバーがほとんどそっくり集まったものである。ただ重要な違いは、故意か偶然か、『中庸姿』の棟梁だった高政の顔が見えないことである。それにしても『七百五十韻』の性格をどう揃えるべきか、興味を覚える発展的課題であるが、次の機会に俟ちたい。

註1 今榮藏・談林俳諧史(明治書院刊)『俳句講座 1 俳諧史』136

頁。以下同書に負うところが多い。

- 2 密田良二・菅野谷高政（明治書院刊『俳句講座』2 俳人評伝上）178頁）に同じ理由を挙げて、すでに指摘しておられる。
- 3 茂木秀一郎・西山宗因に関する二つの資料（「連歌と俳諧」第二巻第3号・昭12年8月刊）に紹介翻刻がある。
- 4 『太郎五百韻』所収の惟中・任口両吟百韻には「延宝六年三月」付けの任口の序があるが、それにはなお「岡山、岡西氏」とある。そして同書巻頭には、同年「五月十二日」に「一時軒大坂、住宅初会興行」の九吟百韻がみえる。したがって惟中の大坂転居はその間の、四月のころかと推測する。
- 5 野間光辰・俳諧太平記（「国語と国文学」昭24年11月号・28頁）
- 6 石田元季・知足と高政（「文学」昭13年4月号・『俳文学論考』所収）ほか参照。
- 7 白石悌三・西日本俳諧資料散歩 二（「近世文芸資料と考証」Ⅰ・昭38年2月刊）の翻刻・解説参照。
- 8 岡田利兵衛・伊藤信徳（明治書院刊『俳句講座』2 俳人評伝上）293頁参照。
- 9 宮田正信・定之（『俳諧大辞典』）参照。
- 10 もっとも、この秋千句は実は二百韻で中絶していることでも推察がつくように、むしろ西鶴の惟中に対する対抗意識に発したものであった（註⑤参照）。
- 11 『拾穂軒都懐帯』所収。なお阿雑軒の俳書目に見える『室咲百韻』一冊は、この百韻を収めたものとわかる。
- 12 今氏註①論文、139～140頁。
- 13 榎坂浩尚・湖春研究（「近世文芸資料と考証」Ⅰ・昭37年2月刊）
- 14 小高敏郎・鶏冠井令徳（『俳句講座』2 俳人評伝上）参照。
- 15 拙稿・惟中の俳風―「皮肉の百韻」をめぐって―（「新居浜高専紀要」第三巻・昭42年3月刊）
△昭42・3・10▽
―高知女子大学助教教授―